

【学位論文審査の要旨】

学位論文博士論文「臼蓋形成不全による二次性変形性股関節症患者に対し理学療法を施行した際の経過分析」について論文審査および最終試験を実施した。

本研究は、二次性変形性股関節症 (Hip Osteoarthritis: 以下, 股 OA) 者に対して, 外来初診時のレントゲンによる重症度分類に基づく股 OA 病期を基に, 3 ヶ月の理学療法指導および自宅でのホームエクササイズの効果を検討したものである。結果として, Kellgren/Lawrence: 以下 KL) 分類による病期 KL3 は, KL1, 2 に比べ疼痛が強く, ADL と身体機能は低下していた。理学療法アプローチにより, どの重症度においても疼痛, 関節可動域, ADL 能力の向上を認めたが, 重症度が上がると改善度が低下するという結果であった。一方, 股関節内旋制限は関節外の機能的問題よりも関節内の器質的問題である股 OA 病期進行に主たる影響を受けている可能性が示唆された。月 1, 2 回の理学療法と毎日の自宅での運動により罹患股関節の機能改善が図れることを示し運動療法の重要性を示した研究である。

副論文 1 編「前・初期股関節症患者に対し股関節痛抑制を目的とした理学療法を行う際に着目すべき因子: 掲載誌 理学療法科学」は二次性変形性股関節症患者に対する疼痛抑制を目的とした理学療法において着目すべき要因を検討し, ホームエクササイズの重要性を証明し主論文での理学療法に活かされている。初回来院時の股関節痛が NRS4 以上の前・初期股関節症患者 39 名を対象とし, 2 ヶ月時股関節痛が NRS2 以下になるための因子について多重ロジスティック回帰分析を用いて検討した。

2 ヶ月時股関節痛の疼痛抑制因子として最小関節裂隙幅 (オッズ比 0.1), 初回外転可動域 (オッズ比 1.5), 2 ヶ月時主観的 stiffness (オッズ比 3.0) およびホームエクササイズの実施点数 (オッズ比 0.3) が選出された。

他の副論文「磁気共鳴画像法 (MRI) を用いた閉鎖筋の筋活動分析: 掲載誌 理学療法科学」も股関節症に対する理学療法に関連する基礎的研究である。股関節軸安定化および股関節衝撃吸収作用を担っている可能性がある内閉鎖筋および外閉鎖筋の機能改善は, 股関節疾患に対する理学療法アプローチとして重要なものである。

最終試験では, 本研究で用いられている評価方法の内容と日本語版の特徴, 対象者の年齢層や職業などによる特異性についての質問がなされた。その他にも, 運動療法の効果なのか, 教育指導の効果なのか, 等の教育指導に関する質問には, 指導としてはものすごく痛くなることは避けるという程度の指導で, 活動量計にて活動量が落ちていないことを確認して実施していたとの回答がなされた。実施した運動については, 副論文において運動の妥当性を示しており, 適切な方法で介入をしていたと思われる。重症度が違う人に対して, 同じ運動が適切であったのかという質問に対しては, 同じ量の運動でも長期で効果が出る人もいるため, 今後, 長期のデータを取ることによって今後明らかにしたいという回答を示した。以上のように概ね的確, 臨床的根拠に基づいた回答がされていた。

今回の研究を行うために検討すべき要因を副論文で明らかにし、本論文で運動療法の効果を明らかにしたことは特筆すべき点である。理学療法の効果を示す、価値ある研究論文であり、副論文を含めた本研究は、博士論文にふさわしいと判断された。

以上のように副査 2 名からの論文審査および最終試験の結果も合格の報告を受けており、以上から論文審査及び最終試験の結果を合格と報告する。